

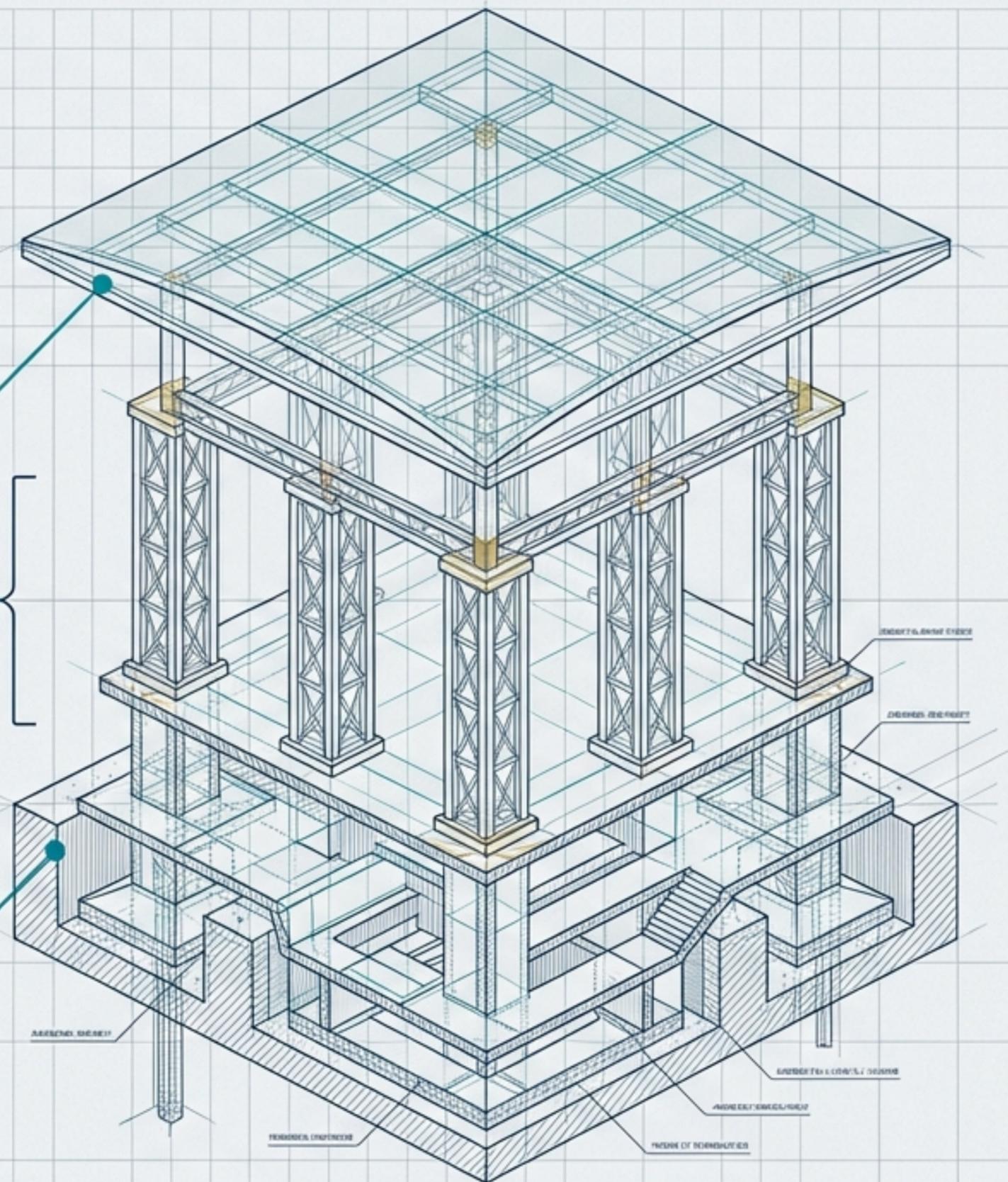
特許明細書の設計図

審判実務者研究会報告書2025に学ぶ、
化学分野におけるサポート要件の実務戦略

特許請求の範囲 / Claims

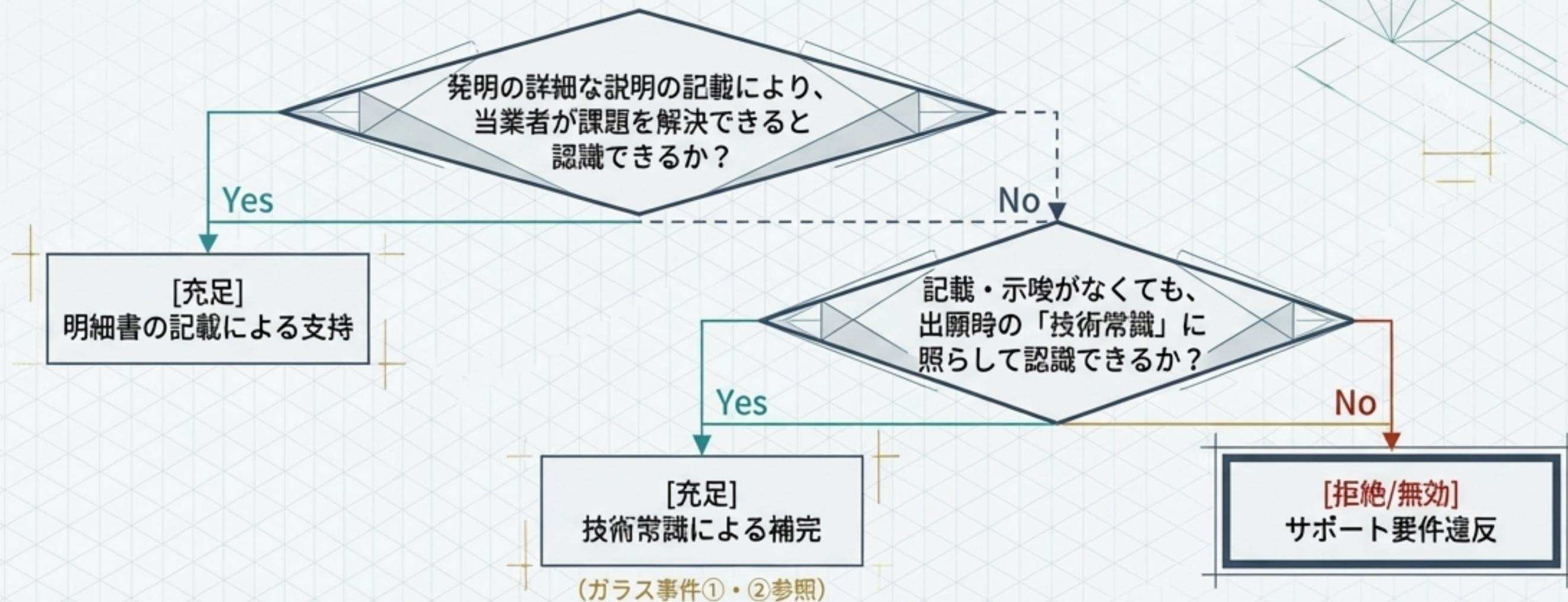
実施例 / Examples

作用機序・ロジック / Mechanism



サポート要件の絶対的判断規範

「偏光フィルムの製造法」大合議判決をアルゴリズム化する



報告書の核心：「課題解決を導くロジックが『演繹的』か『帰納的』かで、明細書に求められる構造は完全に二分される。」

二つの基本設計：演繹的ロジック vs 帰納的ロジック

	演繹的ロジック (Deductive)	帰納的ロジック (Inductive)
ロジックの定義	構成要件と効果の関係が「理論的・機序的」に説明可能。 (例：抗IL-4R抗体のシグナル遮断機序)	機序が不明確なまま「実験データの積み重ね」で課題解決を示す。 (例：食品の味覚・官能評価)
実施例の要件	最低限で可。「最も不利な1点（最不利点）」の証明が鍵。	クレーム範囲を網羅する十分な種類・数・比較例が不可欠。
技術常識の役割	機序の理論的補強として極めて有効。	機序不明のため補完不可能（PVAフィルム事件・減塩醤油類事件で敗訴）。
リスク プロファイル	仮説の破綻リスク。 	端部（上限・下限）のデータ欠落リスク。 

サポート要件を成立させる「力学」

機序の強さ・論理性

機序の強さ・
論理性

演繹的アプローチ：
強固なロジックがあれば、
実施例（重り）は
最小限で釣り合う。

有効な
クレーム範囲

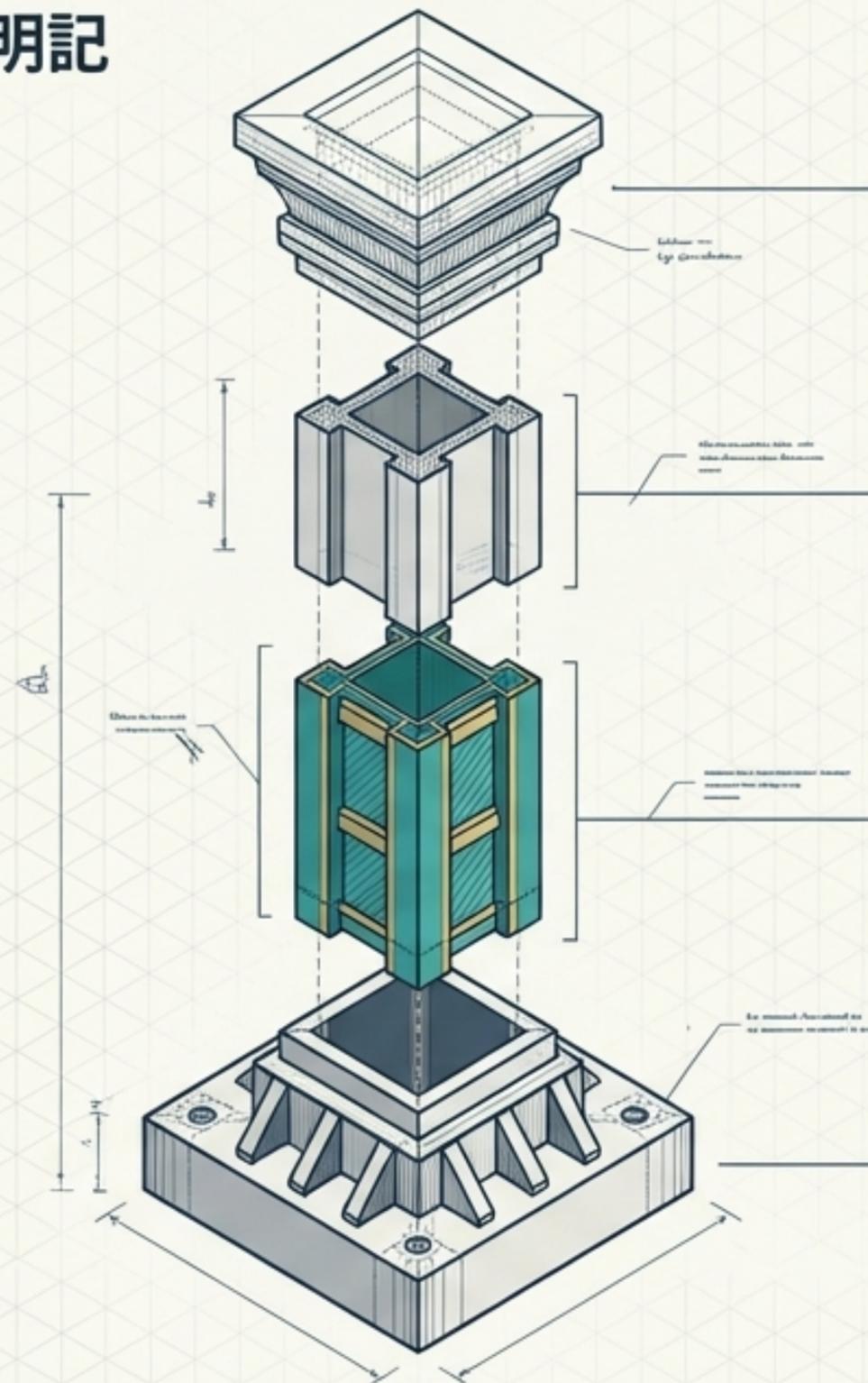
実施例の量・多様性

帰納的アプローチ：
ロジックが弱ければ、
圧倒的なデータ量で
釣り合いを取らねば
ならない。

ロジック（機序）の強さと、必要な実施例の数は反比例する。
機序が弱ければ、圧倒的なデータ量で屋根（クレーム）を支えなければならない。

完璧な明細書の解剖図 (Anatomy of a Perfect Specification)

注意事項②：技術的關係と機序の明記



構成要件の目的

なぜその成分・パラメータが必要か？

数値範囲の根拠

上下限値を調整した際、物性にどう影響するか？

作用機序・メカニズム

課題が生じる原因と、それを解決する仕組み（技術的關係）。

技術的意義

その要件を省略・変更した場合、どのような悪影響（不都合）が生じるか？

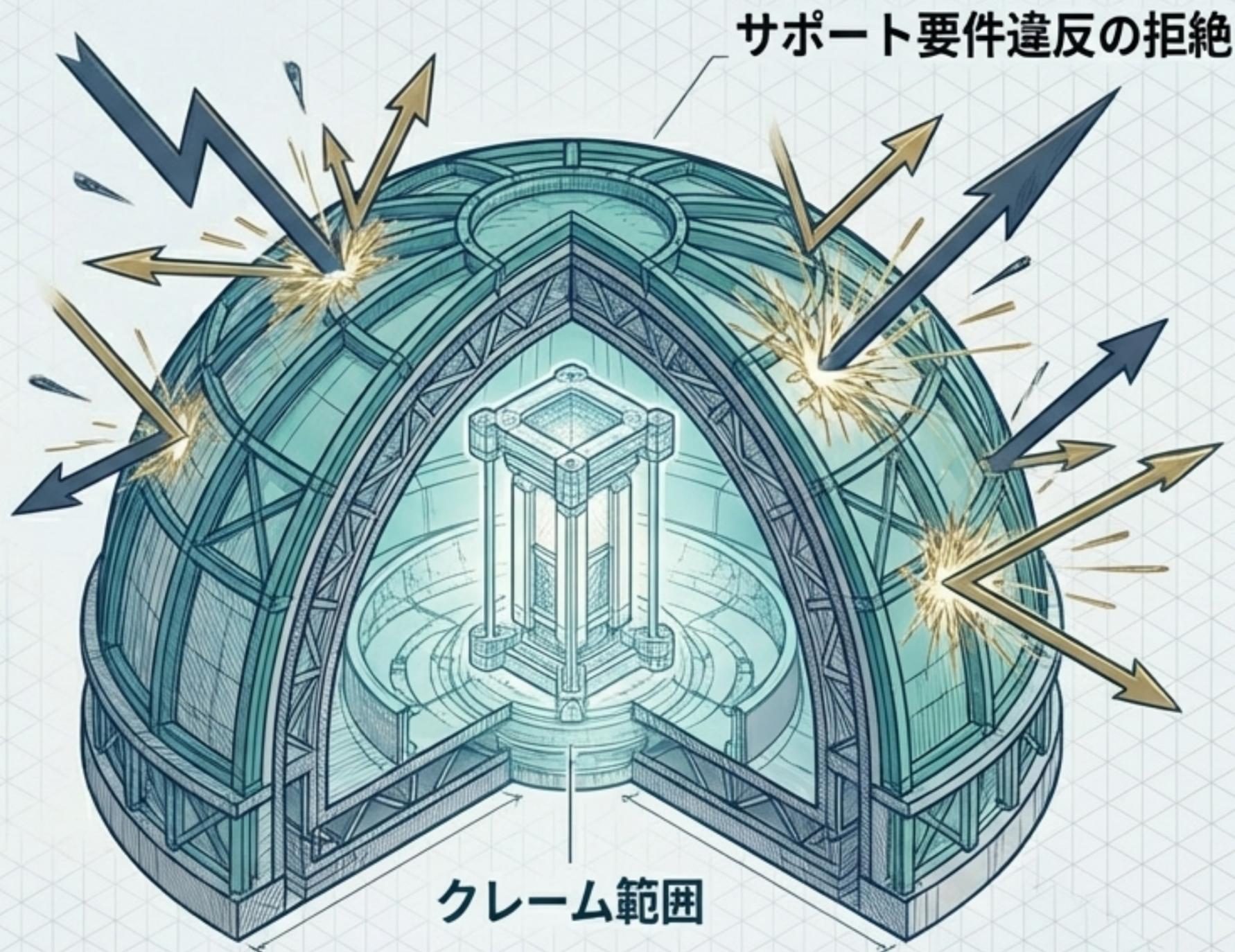
[重要事項]
各構成要件と課題解決の対応関係を1対1で結びつけること。

「仮説」という強固な防具

化学分野では出願時に完璧なデータを揃えるのは困難。

判例の教訓（ボロン酸化合物製剤事件）：
「厳密な科学的証明に達する程度の記載までは不要」。

科学論文における「仮説（推定）」レベルの記載であっても、サポート要件を満たす強力な根拠となる。



[⚠️ 警告] ただし、提示した仮説が「実施例のデータ」と矛盾している場合は直ちに破綻する。仮説とデータの整合性確認が必須。

実施例の配置戦略：吊り橋と飛び石

演繹的ロジック：The Suspension Bridge



[最不利点（最も不利な条件）での実施例]

機序が明確なら、最小限の支柱で広い範囲をカバーできる。

比較例の威力（白色ポリエステルフィルム事件）— 特性を満たさない比較例を積極的に配置することで、構成要件の必須性を対比的に際立たせる。

帰納的ロジック：The Stepping Stones



実施例（上限・中央・下限）

機序が不明な場合、クレーム範囲全体にわたって「隙間なく」実施例を配置しなければならない。

数値範囲のストレステストと「最不利点」



[下限 / 最不利点]

(Lower Limit / Most Disadvantageous Point)

[中央 (Center)]

[上限 (Upper Limit)]

減塩醤油類事件 (Case Study)

- ・ 致命的エラー: 課題解決に「最も有利な数値」の実施例しか記載せず、最も過酷な端部 (最不利点) で課題が解決できる手がかりを欠落させた。
- ・ 結果: サポート要件違反 (無効)。

Drafting Rule: 数値範囲をクレームする場合、「上限」「下限」「中央」の3点を網羅し、特に【効果を発揮する上で最も不利な1点】のデータを必ず死守すること。

技術分野の特性と 「予測可能性」のスペクトラム

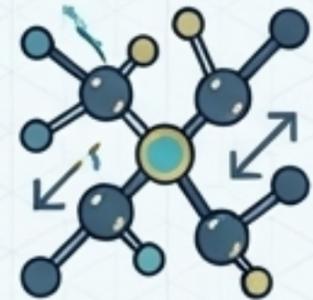
[高・予測可能性]
物理寄り



パラメータと物性の対応関係。
サポート要件を充足しやすい。
機序の説明が主役。



[低・予測可能性]
化学寄り



界面活性剤や官能評価など。
結果の予測が困難。圧倒的な実施
例の充実（数と網羅性）が主役。

【激戦区アラート】 フィルム・樹脂・塗料分野 — 競争が激しい領域では、実施例のない未踏領域への安易なクレーム拡張は厳格に排除される傾向。クレーム広狭と実施例のバランスを極限まで調整せよ。

「技術常識」の諸刃の剣

Edge 1: [サポート要件の補強]

演繹的説明のギャップを埋め、少ない実施例でも広いクレームを正当化する。
(例：ガラス組成の試行錯誤)

⚠ Edge 2: [進歩性の自己否定]

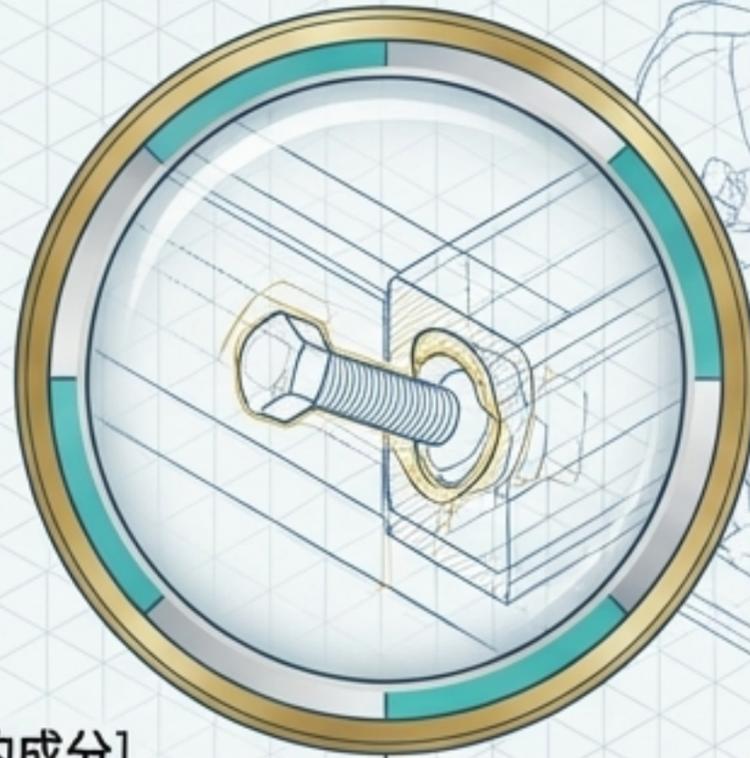
サポート要件を満たすために「それは技術常識である」と主張しすぎると、同じ論理で「容易に想到できた（進歩性なし）」と判断される致命的リスク。

Strategic Imperative

帰納的発明（機序不明）の欠落は、技術常識では【絶対に】救済できない。

技術常識を援用する際は、進歩性の主張ラインと交差（矛盾）しないか、出願前に必ずマトリクス検証を行うこと。

構造的脆弱性の補強：任意成分と独自パラメータ



[Joint 1: 任意成分・付加的成分]

Risk: 他の成分（調味料・酸味料など）が技術的機序を阻害する可能性を放置すると無効リスク大。

Fix: 必須か否かを明記。効果への影響が「ない」または「わずか」であることを記載。反論用データの仕込み。

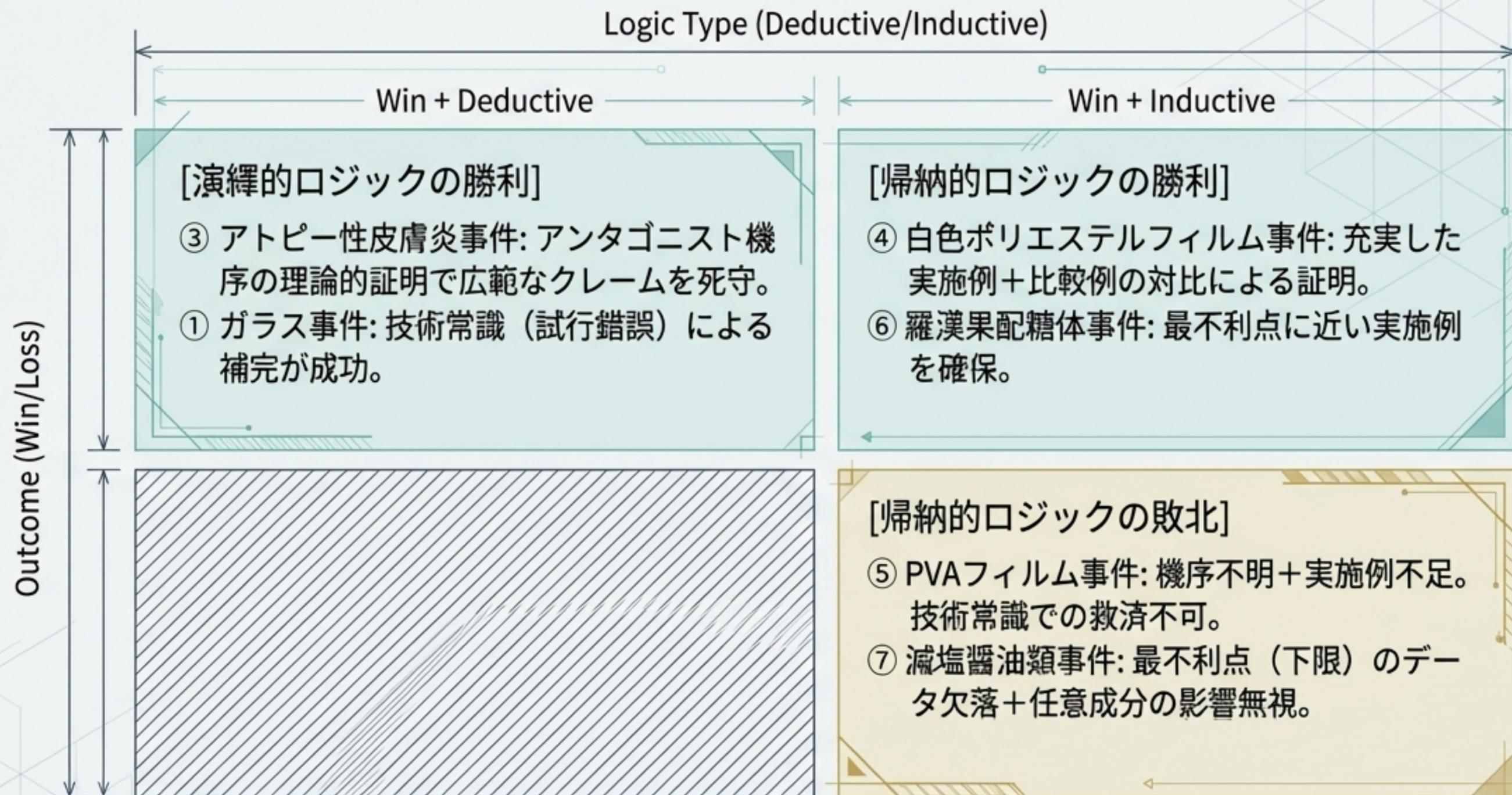


[Joint 2: 特殊パラメータ・独自測定方法]

Risk: 公的測定方法が存在しない独自規定は、再現性と客観性が疑われる。

Fix: 単なる目的だけでなく、係数の「算出根拠」「定義」、そして実施例による圧倒的な裏付けデータを明細書に組み込む。

サポート要件の分水嶺：重要知財高裁判決ダッシュボード



最終設計審査：出願前チェックリスト

化学分野における特許明細書アーキテクトのための10の問い

[ロジックと機序]

- 発明のロジックは「演繹的」か「帰納的」か定義づけられているか？
- 各構成要件の採用目的、および省略時の不都合（技術的意義）が明記されているか？
- 作用機序（仮説を含む）が、実施例のデータと一切矛盾していないか？

[実施例と数値範囲]

- （数値範囲の場合）上限・下限・中央のデータ、特に「最不利点」の根拠があるか？
- 構成要件の必要性を際立たせる「比較例」が配置されているか？

[防御の網羅性]

- 任意成分が効果に与える影響について、反論可能な記載が仕込まれているか？
- 独自パラメータの算出根拠・定義は、第三者が再現できるレベルで記載されているか？
- 援用した「技術常識」は、自らの「進歩性」の主張を破壊していないか？